

巻頭言 「月面宙返り」に憧れて

もうすぐアテネ・オリンピックですね。その男子体操代表の一人、塚原直也選手の父、塚原光男選手に憧れて、私は中学から体操を始めました。光男選手が編み出したウルトラCの技「月面宙返り」に痛く感動したからです。ミュンヘン・オリンピック鉄棒では、金メダルでした。アポロ11号が人類史上初の月面着陸に成功した少し後のことです。

中学では天文少年でもあり、晴れた夜はちょくちょく明け方まで天体写真を撮ったりしていました。特に木星や土星などの惑星、それと彗星には感動したものです。これらのいくつかは天文雑誌の読者の投稿写真の欄に掲載され、「賞金」をもらって得意になっていました。この頃は、今思うときと、授業中はほとんど寝ていたに違いありません。(放課後は毎日、体操の練習をしていたのですから。)

当然、将来の夢は、「体操のオリンピック選手か天文学者」だったのですが、前者は中学3年の時に早々とあきらめました。「実際に月面でやれば、月面宙返りなんてうんと簡単にできるはず」と思い、後者の天文学者を目指すことにしました(ちなみに当時は、宇宙飛行士と天文学者の違いも知りませんでした。)

東大に入学して天文学科に進みましたが、大学でも懲りずに「体操部」に入っていたこともあり、あまり授業には出ず、勤勉な学生とはいえませんでした。とはいえこの時には「自分が本当にやりたいことは何なのか」ということを深く考えて、情報収集や友人との議論に熱を入れていました。そんななかで、「惑星科学(Planetary Science)」という分野があるらしいということを知ったのです。地球物理学科で開講されていた「地球及び惑星内部物理学」の内容に強く引かれ、悩んだ末に、大学院は地球物理学専攻に進みました。

時は流れて「日本惑星科学会」が誕生し、あちこちの大学に「惑星」と名が付く学科、専攻が相次いで出来ました。一方の体操の世界では、今や数々のウルトラEの技が生まれ、それらの中には「たとえ月面でやっても難しそうなもの」まであります。さて、成熟期に入った日本惑星科学会は、子どもたちにどんな夢をプレゼントしましょうか？

五十嵐 丈二